日本放射線技術学会雑誌
第41巻 第5号
1985年8月

42. CT-cholangiographyの検討（撮影開始時間と撮影条件について）
岐阜県立多治見病院放射線科
○鈴木英志・前藤 茂
丹羽保之・渡辺聖佳

（1）撮影開始時間、使用する造影剤の最適に関する検討では CT 値を指標として経時的造影能をみた。造影剤使用量はビリコール60ml、撮影時間は静脈内60分で胆囊、総胆管良好に描出できた。（2）体位変換による胆囊内造影剤の血中濃度に関する検討では体位変換前に比較して平均52%改善された。（3）窓幅の決定のため、造影開始の胆囊内 CT 値と至適 window 窓幅との関係をみると W = 2G + 263 W：window 窓幅 G：胆囊の CT 値。一次相関が得られた。（4）スライス厚はできるだけ薄いスライス厚を用いる必要があるが実用の面から 4mm 厚とすることが適当と考えられた。

43. Myelography 後の CT における撮影体位の検討
星ケ丘厚生年金病院放射線部
○友森周三・中山多門・髙橋博史
脇村 聡・长崎 弘

ミエログラフィ後の CT における撮影体位は、一般的に腰椎部では腹位、胸椎では仰臥位で行われている。しかし疾患の違いにより、撮影体位を変えることで診断的価値に有意の差が生じた。このことから疾患別に対し

44. 腹部 CT 検査における呼吸管理

藤田学園保健大学病院放射線部
○沼原孝彦・生 Yap 勝

喉頭の CT 撮影は脳腫瘍等の形体診断に有効であるが、

45. CT 撮影時における造影剤注入速度と撮影のタイミングに関する検討

公立甲賀病院
○大原和昭・中森勇二・宮本義士
上村光司・村上省悟・関本 勝

目的 造影 CT の施行方法にも種々のものがある。今回はわれわれは診断上最適な enhancement を得るため

名古屋大学医学部附属病院分院
orra 植田樹・堀部 富

患者の呼吸の状態を観察できるエアーバッグ式呼吸波形モニタを用いて、腹部 CT 検査時にもっと有効と考えられる呼吸停止法の検討を行った。呼吸停止法の検討としては、最大吸気法、軽い吸気法、安定呼吸法での、流速計と胸部写真により、特に吸気法では、呼吸停止時口や鼻からの空気の流出はなく、横隔膜の挙上が見られ腹部臓器の変動が起こることを確認した。安定呼吸法は、この横隔膜の移動量が小さく、再現性に優れており腹部 CT 検査時、安定吸気法がもっとも良好であると考え、また安定吸気法で行う場合、呼吸波形モニタ下でのスキャリンが有効であることを述べた。

46. 喉頭部 Direct Coronal CT について

藤田学園保健大学病院放射線部
○沼原孝彦・生 Yap 勝

喉頭の CT 撮影は脳腫瘍等の形体診断に有効であるが、